

IAUD Newsletter 第3号 (2008年6月号) 目次

1. 特集：IAUD設立に至る道 (3)
「国際UD会議2002開催からIAUD設立まで (後編)」 1
2. 富士通のユニバーサルデザインの取り組み
「誰もが参加できる IT 社会を目指して」 9
3. Case study: 標準化研究 WG
「IAUD マトリックス開発」 UD 製品の開発に役立つ標準化のツール&プロセスの提案 . . . 17
4. 世界の UD 動向：ノルウェーUD 講演実施報告ほか 20

特集: IAUD 設立に至る道(3) 「国際 UD 会議 2002 開催から IAUD 設立まで(後編)」

(IAUD 設立準備会代表幹事／初代理事長に当時の状況や苦労話を聞く)



ゲスト; 川口光男 (IAUD 理事会相談役／前理事長)

聞き手; 成川匡文 (IAUD 副理事長／情報交流センター所長)

出席者; 川原啓嗣 (IAUD 専務理事／情報交流センター副所長)

川原久美子 (IAUD 事務局長)

成川 ; 海外の企業が入会したいといった場合、どうするんですか？

川原 ; 外国の企業の場合は、理事会だけでなく評議員会で入会を審議いただくことになっています。

川原久 ; 立命館大学教授のアリステア・マクドナルドさんは今、個人会員として登録されていますね。彼は日本語で構わないと言ってくれています。外国人だからと特別扱いしないで欲しい、むしろ情報から阻害されるのが恐いと…

川口 ; ゆうまぐみみたいな、あるいはこのNewsletterみたいなものもね、日本語だけじゃないですか。そうすると外国人会員に対しては、情報発信のバリア、情報のバリアになっちゃうんですね。言ってることとやってることが違うじゃないかって。

成川 ; ホームページについて先日議論したんですが、外国語版と翻訳の問題も話題になりました。翻訳の費用がかかりますからね。

川原 ; 金と手間ですね。

川口 ; だから、そうそう、自分たちで全部やるんじゃなくて、広報などアウトソーシングできるところはするってね。そのためにはお金が要る、そのためには事業化を進める、もしくは会員拡大をするってね。

成川 ; 事業化をして、収入の目処を立てて、それをここに使うんだって使い方も考えないとね。

川原 ; もっとめりはりをつけて、例えば今年度の成果報告会に、このPJの活動事例を発表する、そこに集中的に予算を投下しようという考えがあってもいいよねって話は部会からも出ていますね。

川口 ; それこそ本来は、三役っていうか、あるいは理事長のトップダウンで、予算の枠のめりはり付け、あるいは選択と集中を徹底しないといけないんですよ。日本を代表する企業の集まりですから、難しいところもあります。

それで、だんだん思い出してきましたけど、ぼくがなぜ真剣にやり出したかというのですね、さっき日本を代表する企業の集まりと言いましたが、第1回目の富士通さんでやった時の印象から、自分が動かないとこの集団は前に進まないと思ったんですよ。ちょっと偉そうな言い方ですけど。なぜかという、会社ですとね、例えばトップがどうのこの動くより、いかに部下を動かすか、ということじゃないですか。逆に、この組織は上も下もない、従って会社的な発想では動かせない、自分が動かないと、微動だにしないとね。例えば、(IAUDの) 予算時期になるとですね、当時のデザイン本部長の僕がですね、予算書類と睨めっこし、電卓をたたき、経理みたいなことをやり、事務局長と電話とメールでああでもない、こうでもない喧嘩もどきのやりとりを頻繁にしてましたから、古川順子さんという当時の僕の秘書から、一体何やってるんですかって言われましたね。

だから結局、おみこしに乗ったって言いましたが、担ぐほうになっちゃったんですよ。

川原 ; 設立する前に、ほとんど骨格はできていたはずなんですけど、あの1年、相当やりとりしてましたよね。

成川 ; でも1年でよくできたって感じがしますよ。会議終わったときにね、古瀬さんも川口さんもまだそういう頭はなかったっておっしゃってましたから。それは、やはり殿下の存

在が大きいのかな。

川口 ; ですよ、絶対大きい。さっきも言いましたけど、殿下という求心力が働いてね、わーっと集まったんですよ。で、理事企業の偉い立場の方に評議員をお願いしたものですから、僕も含めて、その部下である理事のみなさんはね、動かざるをえないんですよ。

成川 ; そこまでいけばね。

川口 ; そう。

成川 ; でも殿下もすごいですね。組織をつくることを発想して作れと言うこと、そんなこと頭がない、2002年の会議が終わって放心状態の人たちに。

川口 ; 殿下の考えというのは、何回かお会いしてから分かったんですけど、地に足が着いてますね。あれはびっくりしました。要するに、殿下って言うと、「よきに計らえっ」っていうイメージがあるじゃないですか。そうじゃなかったですね。全然「よきに計らえ」じゃなかった。

川原 ; 先を見ている。私たちには見えない時代の先を見てらっしゃいますね…

成川 ; 結構、情報量が多いんでしょう。有識者や著名・高名な方々とのお付き合いも多いでしょうし…

川口 ; もうひとつはね、あれって思ったのがね、ふたつぐらい覚えてるけど、たまたま殿下がね、テレビかなんか見てて、アメフトかなあ、どっちが勝ってるとか負けてるとかいう話をされたんですよ。もうひとつはね、トランポリンをテレビショッピングで買ったっていうの覚えてるんですよ。そういうことをお聞きした時、ぼくは何を思ったかっていうと、殿下は我々と同じような生活してるんだなあっていうことですね。

成川 ; 殿下は庶民的ですよ、ディスクジョッキーとかやって。

川原 ; べらんめえ口調でお話されたりとか。

川口 ; まあ、そういうこともあって、あの人は非常に庶民的だなあって、地に足が着いてるっていうかね。だから従わざるを得ない、って、殿下だっていう意味とは違った意味でね。なるほど、っていうのは随分あったね。たしか、立ち上げ時期についても的確なご指示をいただいた記憶がある。

川原 ; そうです、最初、立ち上げを7月にしようと言ってたんですよ。殿下にそういう案を提示したら…設立をしてからみんなに声を掛けるんじゃなくて、みんなと一緒に作った、っていうように持っていかないとダメだ、って。それで、7月だと当初考えていたのを11月まで延期した。その後、発会式の会場については富士通の蔦谷さんが色々調べてきてくれたんですよ。

川原久 ; いくつか候補があって、じゃ今、一番注目を浴びてる〇〇〇〇〇〇にしようかって話をして、情報保障なんかどうなの、とか、アクセスはどうなのかとか、ちゃんと調べてから会場選びなさいと殿下から言われてたんですよ。それで、いろいろ探して、結果的には渋谷のセルリアン東急が空いてたからそうしたんですけど。

川口； セルリアン東急は元々、皇室との関係ってあったんじゃないか？

川原久； 特になかったと思いますよ。たまたま空いてたっていうことと、価格がそんなに高くないっていうこと、サービスしますっていうオファーがあちらの方からあって、セルリアンも建ったばかりで、大きな会合を受けたいって思ってたんじゃないですか。料理なんかも、値段の割にたいへん凝ったものを、考えて出していたで…

川原； 発会式の時のレセプションの料理は質が高かったですね。

川口； すごかったよね。セルリアンとしてもね、総裁を、殿下を迎えられるっていうのは、なにかの時に錦の御旗になるよね。

川原； そうですね。あれ以来、ずっとセルリアンで評議員会をやっていますけど、支配人からすべてお出迎えに出てきて…

川原久； だからといって、支配人の方々が山本会長とか岡本議長に直接ごあいさつするわけじゃなくて、ただお迎えをするっていう感じで、静かな感じで立っていらっしゃるんですよ。ごあいさつだけされて中に引かれるから、感じがいいねっていうのと、料金の割にはサービスがいいし、一度、ある評議員の方から他の会場という案も考えてみたらって言われて、見積りを取ったんですよ。そしたら、金額が全然違うんです。他は3、4倍かかるんですね。

川口； ほんとにいろいろありましたね、一時は本当に立ち上がるのかって、悩んだこともありましたよね。広報発表、9月30日、これがひとつの大きな節目というか、自らに掛けたプレッシャーだったんですよ。これやっちゃったら後に引けないんですよ。ぼくらの腹を固めたひとつの大きな儀式だったんです。

川原； そうでした。広報発表で目標数100社って言ってましたか？
とにかく、10月24日時点でまだ34社しか集まっていない。みんなに動員かけて、できるだけ集めようって檄が飛んで… よく109社集まったものです。

成川； ここから70くらい増やしたんですね、1ヶ月で。やればできるっていうことですかね。

川原； 私は設立してすぐは、いかに早くIAUDをオーソライズさせるかということに、とても神経を使ってたんですよ。いろんなところから、抵抗や圧力がかかる、それも覚悟しておかなくてはと…

川口； この時にね、UDCとか共用品推進機構、それからUDF、この3団体、UDに関する先輩の団体にかなり気を遣いましたね。僕はそれぞれの団体に詳しい人にご一緒していただき、この3つの団体を周り、設立の趣旨をご説明し、今後の協力と支援をお願いしました。経済産業省にも行きましたよね。当時の経産省製造産業局のデザイン・人間生活システム政策室室長の清水さんが好意的で、こういう団体作って、プラットフォーム組んで、後押ししてくれないかって言ったら、後押しはいくらでもやります、小泉首相の方針で、官から民への流れですから、官が作って、民に押し付けるようなことはしない。ですから、今回川口さんが言われているようなことは、ウェルカムです、と。

成川； どんどんやってください、と。

川原； あの時の、清水さんが室長の時の体制は、大変意欲的で、結局、発会式に大臣の出席を決めてくれた。

川口； ちゃんとしたそれなりのお手紙書けばって言われて、書いたんだよね。

川原久； そうそう、理事長名でもなく、事務局長名で依頼状を書いてってことになり、知恵を絞って書きました。そしたら、それを大臣官房まで持って行ってくれたんです。

川口； 最初はね、むしろぼくらが遠慮して、事務次官とか、副大臣クラスをお願いしたら、「大臣出しますよ」なんて言ってくれたんだよね、確かね。「えっ！」て感じだったんですよ。

川原久； 経済産業省の担当の方々がとても熱心で。大臣が来るとなったら、じゃあ局長もってね。

川口； ぼくに言わせれば、やっぱり I A U D っていう存在に価値を見出してくれた。もちろん、殿下を担いでるっていうのも当然ありますけどね。それ以上に大きな広がりを感じてくれてね、これはすごいなあ、と。

川原； あの時の大臣のスピーチが奮っていましたね。小泉政権が続く限りは支援しますって、すごいこと言ってくれて…

成川； 大臣は誰でしたっけ、当時？

川口； 中川昭一さん。それから経団連からは、西室さんが来てくれた。

川原久； その後、東証の社長になられたんですけど、西室さんのスピーチも良かったですよね。

川原； かつこよかったですよ。背筋がピンと伸びて、杖をついて威厳があって。感動しましたね。

川口； 大臣と同じように経団連挙げて支持しますみたいなことを、最後おっしゃったんですよ。やっぱり大臣もそうですけど、日本を代表するような人っていうのは、うまいなあ、スピーチが。

川原； 経団連活動している人は、日本経済を背負っていますからね。我々にはイメージできないですね。

川口； 殿下もあいさつの中でね、スキーだっけ？

川原久； アウトリガー。ストックの先に小さなスキーが付いた道具ですね。

川口； 要するに、高飛車な話じゃなく、さっき言ったように地に足が着いた話とかね、この人（川原氏を指し）を持ち上げたりですね。タッチなんとかという…

川原； タッチミーという、私が 20 年前にデザインした視覚障害者も使える置時計があるのですが、それを壇上に持って上がり、例に挙げて説明してくれて…

川口； U D っていうのを、事例を踏まえて分かりやすく説明したのと、I A U D との関わりをね、こういう事例によってきちっと、知らしめたんだよね。それが結構評判良くってで

すね、結構って言ったら失礼ですけどね、普通お堅い話するじゃないですか、全然違ったのね。全然、高邁な？話じゃなかったのね。あれはさすがだなあって思ったよ。

成川； 設立の前から取組んでもらってるっていうの、なかなか見えにくいじゃないですか、だから、外から見ると、総裁という名前だけお借りし、あいさつだけしてもらって、みたく見えたりしますよね。

川口； そうですね。それはありますよね。

成川； そういう話、そういう内情みたいなものを Newsletter などを通じて会員の皆さんにご紹介するとともに、記録として残していくことも大事な事かなあと思うんですよ。

川口； そうですね。僕も Newsletter 第1号を読んだ時に、これはいいことだなあと思いました。あれで残っていきますからねえ。きちっと。

成川； 理事会もそうだし、だんだん最初からの生え抜きの人って、交代していきますからね。新しい人が来て、また雰囲気変わったりする…そこに最初の理念みたいなものがちゃんと残ってないと、何でこんなことやってるんだろう、みたいな話になる。だから、理事だけでなく、委員会とか部会とかに参画している人も含めていかにこういう情報を共有できるかっていうことが重要で、そのためにも Newsletter とか情報交流センターでうまく発信していけるようになればいいですね。

川口； 今おっしゃられたことは、まさに僕らは前から危機感持ってますね。専務理事と事務局長はある程度ずっとやっていただかなければいけません、会社に所属している理事さんは、人事異動とかで交代するじゃないですか。もう既に設立メンバーは半分以下ですよ、多分ね。だからこそ、情報を共有する、発信する、残すっていう情報交流センターの役割は極めて重要ですよ。

川原； 最近、法人化の話が出ていますが、法人化って言うけど、いきなり公益法人化じゃないんだろう、一般社団じゃないのとか、様々な議論、疑問が一気に噴出しています。殿下からは当初から任意団体とはいえ、極めて公益団体に近い任意団体ということで活動しなさいって話が出てました。設立趣旨を読むと、まさに公益団体の掲げる趣旨だと明白なわけです。しかし、これを会員として一度きちんと議論することが必要な時期なんですよ。また、中期ビジョンの件ですが、あれが今年の3月に一区切りして、次期の中期ビジョンを策定しなくちゃいけない時期になっていまして、しっかり川口さんにもタスクフォースのメンバーに入ってもらいますので。

川口； 中期ビジョンは、非常に良かったと思いますね。あれは、当時の7委員会の委員長さんたちが自主的に I A U D の今後を考えるというテーマで合宿を行ない、議論し纏めた案を僕ら三役に提示した。僕としてはこれはよく考えていただいているので、もう少し検討すべきところを詰めるようお願いし、理事会に提案、当時の後藤副理事長にリーダーになってもらい、中期ビジョンとして纏めていただいた。

川原； 当時、中期ビジョン策定と委員会再編の二つの課題がありましたから、理事の選抜メンバーでグループを2つに分けて、中期ビジョンの方は副理事長の後藤さんに取りまとめをお願いしたんですね。

ところで、川口さんは、2006年の国際UD会議の実行委員長もやられましたよね。設立準備会の代表幹事、そして理事長、さらに実行委員長と立て続けにきついことを背負うことになりましたが。

川口 ; これもある意味、うまく口車に乗せられたっていうか。もともと、ぼくは理事長と実行委員長は両立できない、IAUDの運営と国際会議の企画・運営とは分けるべきというのが自論だった。

川原 ; 川口さん、そういう考えでしたね。私は、それは絶対うまくいかないからって。

川口 ; そしていつのまにか気が付いたら実行委員長に祭り上げられてた。みなさんよいしょがお上手ですからね。

川原 ; 実行委員長が別の人だと、IAUDに頭が二つできるでしょう、私はこれはまずいと思ったんです。そういう意味で、兼任すべきだと。

川口 ; 実行委員会に委員として参画している理事とそうでない理事との間で、情報隔差の問題もありましたね。実行委員会の内容を理事会で報告しても行間が伝わらない、すったもんだあり、悩みましたね。

川原久 ; いろいろあって、（実行委員会には）途中で部会長に入っていた。

川口 ; で、部会の中で情報を共有していただき、IAUD全体で国際会議を盛り上げましょうってことになり、何とか一丸になれた。

川原 ; そしてみなさん、徐々に熱く盛り上がっていった、なんでこんなに熱いんだろうと思うくらいに。

成川 ; 皆さんが熱いってのはほんとですね。

川原 ; 熱く駆り立てる何かがあるからなんでしょうね。

成川 ; 最初、随分面白いなあと思いましたよ。というか、IAUDってすごいなあってね。本来あたりまえなんだろうけど、みなさん、本気になってるって……

川口 ; 本当にすごいですよ、建前でなく本音の議論をするっていうか、でもその分、マネジメントは難しかった。一方で、ぼくはね、みなさんには失礼かもしれないけど、この経験を通して組織運営の大きな勉強をさせていただいたと思ってるんですよ。うまく運営できなかったという反省も多くありますが、業種・業態を超えたこれだけの大きな組織をマネジメントしなければいけない、これはとてつもない経験というか勉強ですよ。もっとも、やっている最中は必死で、こんなこと思ってもみなかったですが。

川原久 ; それは、日産自動車の牧野さんやトヨタ紡織の大島さんもおっしゃっていました。48時間デザインマラソンをやるっていう、その実際の中身をやるってことよりも、それをオーガナイズする、マネジメントするというのは、自分の管理者としてのスキルアップにもものすごく役に立っていると。この方法をマニュアル化して、ひょっとして管理職教育のマニュアルとして、販売できるのじゃないかと。

川原 ; 話がいろいろ飛んでしまいましたが、最後に、川口さんの立場で、今のIAUDに望むこととか、これからに期待することとかありましたらお願いします。

川口 ; 国際化とプラットフォーム化ですね。国際については前にも述べましたが、発足当初は日本のUDを国際的に発信するという意味で、国際という2文字をこの団体の冠として

付けましたが、いろいろな国際会議に参画したり、2006年には京都で我々主催の国際会議も何とかやり抜き、それなりの活動基盤ができたと思っております。そろそろ本格的に世界を相手にしたIAUDとして、活動の幅を広げる時期じゃないかと思えます。例えば、国際的な会員勧誘、主要国への拠点設置、英語による情報発信など。また、プラットフォーム化については、IAUDの設立理念、UD原則、活動（事業）分野など、今までの活動を整理・体系化し、定量的に纏め、何らかの形にして発信するという事までを含みます。会員が常時帯同できるIAUDの行動指針（バイブル）みたいなものになれば、なおいいですね。

ただ、国際化もプラットフォーム化も、実現に向けては、団体としての位置付けを明確にする法人化の検討、活動原資の確保という意味も含む、成果の事業化（冊子化）、会員の拡大、イベントの開催など、やらなければいけない難題はたくさんありますが、それができれば、IAUDの更なる認知度向上に繋がり、必ずプラスのスパイラルになると信じています。

成川； やっぱり川口さんがおっしゃるように、IAUDの原則のようなものを作って、世界に発信して問いかけるとか必要ですね。

川口； 発信すれば、なんらかのコメントなり意見が返ってくる、それを次のステップに繋がればさらなる質の向上になる。完璧なものというのは存在しないわけですから、まずは世に問う、そしてバージョンアップする、そういうことが重要なんですよ。

川原； IAUDが素晴らしいと思うのは、UDの定義として、「ひとりでも多くの人が暮らしやすいと実感できる社会を作ること」と、言い切ってるんですよね。モノづくりや、システムづくり、概念づくりを超えて…実際、社会づくりだってね。私、これは世界的に見ても一歩先に踏み込んだ提案だと思うのです。アメリカは、まず法律作って、道具とその周辺の生活環境をつくり、そして都市環境を整備していこうというアプローチでしょう。いろんなアプローチがあって良いと思うのですが、いずれにしろ、ひとりの個人、ひとつの団体、企業だけでは出来ない話ですから、何人も集まってフォーメーション組まないと、あるいは国際的に連携を取らないとできない。だから、IAUDはやる意義があるんだと…
川口さんには、今後も折に触れ、登場していただこうと考えていますので…

川口； それはプレッシャーをかけているんですか…

成川； ここで、分かりましたと言ってもらえれば、うまくまとまるんですが…
録音されてますから。

川口； まあ、この場ではお三方に敬意を表して、出来るだけ協力させていただきますということで言葉を濁しておきましょう。

川原； ありがとうございます。

富士通のユニバーサルデザインの取り組み

～誰もが参加できるIT社会を目指して～

富士通株式会社 富士通デザイン株式会社
(国際ユニバーサルデザイン協議会 理事) 加藤 公敬 2008年6月

●はじめに

富士通グループは「お客様起点」の考え方を、商品開発、サービス提供、営業活動などの中で徹底することが重要と考え、日々の業務で実践し、誠意を持って行動することを行動指針の一つとしてきました。また、そのためには前提となる現場・現物・現実をしっかりと見据え、その背後にある本質を追求しようとする姿勢「三現主義」を大切にしてきました。これらのことが富士通のユニバーサルデザイン(UD)を推進してゆく根底にも流れていると考えています。

しかし、そうしたUDの考え方を実践し、具体的な商品・サービスとして開発し提供してきましたが、富士通グループの全ての商品・サービスからするとごく一部であり、企画・設計・開発の標準プロセスとして浸透しているかという、まだ道半ばというのが正直な実感です。

ここでは、そんな取り組みのアウトラインをご紹介しますことで当社の活動をご理解いただき、また、IAUD会員の皆さまからのご意見やアドバイスもいただき、今後、皆さまとともにUDの浸透と実践をさらに深めていければと願っています。

●富士通のUD理念と基本要素

社会の急速な情報化によりITは日常生活にとって必要不可欠なものとなってきています。しかし、利用者の増加とともにその多様性も大きく広がり、「デジタルデバイドの是正」ということが社会的な課題となってきました。富士通グループでは「利用者の拡大」と「使いやすさの向上」の二つの方向性で、「誰もが参加できるIT社会」の実現を目指すことを基本理念としてUD活動に取り組んできました。また、以下の4つの項目を具体的な配慮ポイントの基本要素としています(図1)。

■ ITのユニバーサルデザイン～人間中心設計(HCD)から



図1 富士通のUD理念と基本要素

この理念をもとに具体的な展開を考えると、第一にお客様の多様性を理解し、IT 製品単体でなくシステムとしての製品群、それを用いる施設や環境、そこで行われる業務や人の動き、心理状態など広範な要素を総合的に捉えていく必要があります。そのため、富士通の UD への取り組みは JIS など規定されている要求範囲をベースとしながら、さらに広い領域で捉えて推進しています (図 2)。

■ 利活用の現場を意識し、ユニバーサルデザインを推進

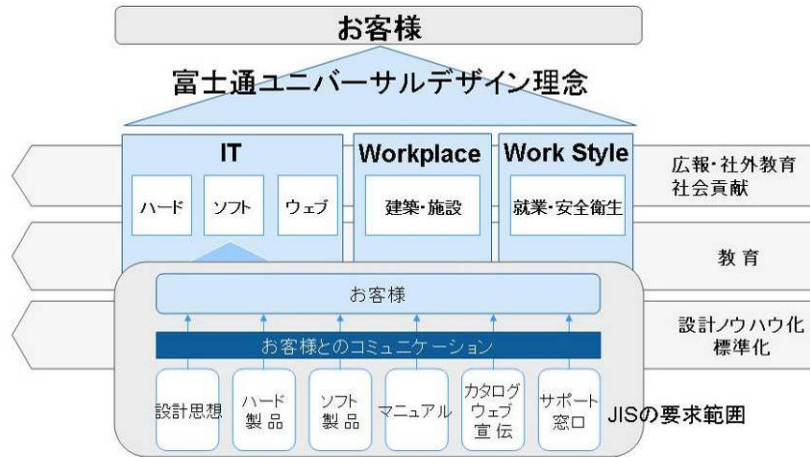


図 2 富士通の UD の活動領域

商品・サービスを「IT」、「Workplace」(WP)、「Work Style」(WS) という 3 つの側面で捉え、利活用されるお客様の現場 (フィールド) からの視点で、これらの要素が全体最適となるようトータルに開発・提供することを目指しています。そのためには標準化と同様、お客様との接点づくりや社内教育活動なども重要な要素です。

また、お客様のビジネスを変革してゆくフィールドイノベーションのレベルで実効性のあるソリューションとするためには、お客様のビジネスの現状を正しく把握し、お客様の声を積極的に反映できる全体プロセスも重要と考えています (図 3)。

■ 根拠に基づく、意識改革・全体最適化

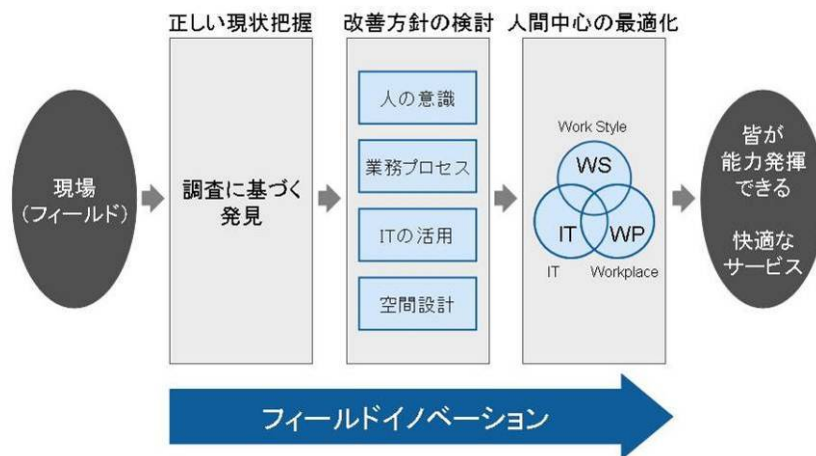


図 3 ビジネスにおける UD プロセス例

●取り組み事例

当社の UD 事例として挙げられることの多い携帯電話や銀行 ATM などにおいては人間工学や UD 視点に基づく操作性改善が比較的早くから取り組まれています (図 4)。しかし、UD プロセスにおいては結果的に商品やサービスが使いやすくユーザーへの配慮がされているだけでなく、その開発プロセスとして幅広いユーザーの評価や意見を取り入れるしくみが、組み入れられていることも重要です。



図 4 機器の UD 事例

また、例えばこれまで IT リテラシーの高い操作者を想定していたサーバーなどでは、最近ではオフィス設置が普通になり、お客様自身によるメンテナンスへの配慮など、利活用するユーザーや環境の変化を常に把握することの重要性が高まっています。これらのプロセスの考え方や具体的な配慮点を規格やガイドラインなどのかたちで標準化を進める取り組みも進めてきました (図 5)。

プロダクトビジネスの分野ではお客様＝実際のユーザーが商品を利用する際にどう感じているか、何を考えているかなど、お客様の現場での評価やニーズをしっかりと捉え、商品開発にフィードバックしてゆくことが重要です。このことから、お客様の感じる品質を「感性品質」と定義し、感性品質の評価を推奨する規格を 2007 年度にもものづくりの規格の一つに加えました。具体的な内容検討と推進は、品質保証本部を事務局として事業部、デザイン部門で WG を構成し、現在、実際の商品開発への適用や教育・啓発活動を進めています。

この他にもデザイン部門ではウェブのアクセシビリティやワークスタイルに関するガイドラインの作成に取り組んできました。また、ソフトウェアの企画、開発、運用、保守の標準プロセスについてもユーザビリティの視点から見直し作業の支援をしています。

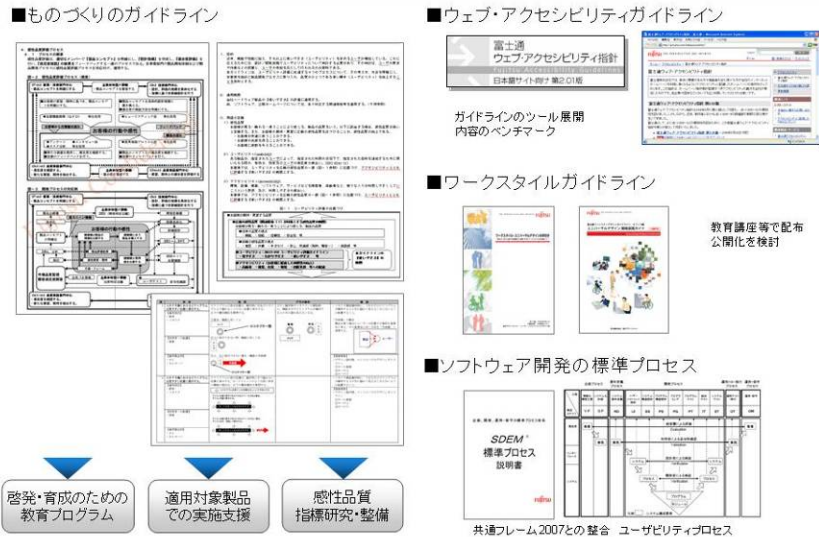


図5 標準化・ガイドラインづくりの取り組み例

「富士通ウェブ・アクセシビリティ指針」はホームページ制作の際にアクセシビリティの観点で配慮すべきポイントをまとめたもので、お客様や一般の方にも幅広く活用していただけるよう、2002年から富士通ホームページで公開しているもので、2004年6月の第2版から JIS X 8341-3 にも対応した内容となっています。また、この指針に基づきウェブのアクセシビリティをチェックする3つのツール「WebInspector」、「Color Selector」、「Color Doctor」を開発しました（図6）。これらはウェブページ制作者のためのツールで、HTMLソースを自動チェックするWebInspectorは2002年に社内公開し、翌2003年に公開ページよりWebInspector2.0として無償公開をはじめました。Color Selectorは使用する文字と背景の色の組み合わせが適切か確認するツール、Color Doctorはウェブページが色覚障害者にどのように見えるかをシミュレーションするツールです。これらのツール群を2004年に「Fujitsu Accessibility Assistance」としてまとめ、指針とともに富士通ホームページで無償提供してきました。



図6 ウェブでの標準化・ツール化の取り組み

これらのツールは改善とバージョンアップを重ね、現在は WebInspector 5.1、Color Selector5.1、Color Doctor2.1 となっており、グローバル対応も英語版、中国語版、韓国語版がそれぞれの富士通グローバルサイトで公開されています。これらのツール群は、2008年4月時点でダウンロード実績が延べ20万本を越え、日本産業デザイン振興協会が主催する2006年度グッドデザイン賞に続き、ドイツのデザイン振興団体が主催するユニバーサルデザインを対象とした初の国際的なアワード universal design award 2008を受賞するなど、国内外で高い評価を受けており、世界各国のお客様に活用いただいています。WebInspector はアクセシビリティをチェックする機能に加え、ウェブ制作者が指摘点を効率的に修正できる機能を組み込み、WebInspector Proとして2006年12月に商品化しました。

一方、ウェブの利用者向けとしてWebUDというソフトウェア商品を開発し、2004年12月から提供しています。WebUDは、音声読み上げ、漢字の読み仮名表示、文字や図の拡大縮小、文字と背景の配色変更、多様な入力デバイスへの対応など、高齢者や子供、障害者など幅広いユーザーのウェブ利用を支援するツールです。富士通ホームページのほか、自治体などお客様のサイトから提供されており、利用者は自分のパソコンにインストールして使用します。

また、これらの活動を通して得られたノウハウや標準化したガイドライン、ツールなどを活用し、お客様のウェブサイトのアクセシビリティを改善・向上するサービスを商品化しています(図7)。

■ 幅広いノウハウを活用しサービス商品として提供





サービス	調査/分析/評価	<ul style="list-style-type: none"> •専門知識を持つエキスパート •JIS X8341-3をふまえ、問題点から改善案まで、具体的提案 
	ガイドライン作成	<ul style="list-style-type: none"> •ページ目的に合わせ、ルール作成、ノウハウ共有を推進 •お客様固有のガイドラインの作成 
	コンテンツ作成	<ul style="list-style-type: none"> •利用者配慮で、コンテンツ開発支援 •画面デザイン、ひな形作成、コンテンツ作成などを実施 
	教育実施	<ul style="list-style-type: none"> •構築、運営担当者様へのノウハウ提供 •受講者のレベルに合わせた、わかりやすい解説 

図7 ウェブ・アクセシビリティ・サービス

ソリューションビジネスの分野でも現場モニタリングなどお客様のビジネス現場の多面的な分析をもとにした、トータルなデザインアプローチへのニーズが高まっています。現場分析のアプローチとしては業務分析や空間分析などの目に見える実態把握だけでなく、インタビューと現場観察により、現場担当者や上司、経営層の意識や心に描くべき姿の違いなどから課題を発見していくような手法も取り入れています。また、新しい提案の効果分析の一つとして、CO2削減効果など環境要因を明確にするプロセスも同時に提供しています(図8)。

■ 徹底的に現状を把握し、潜在的事象をもれなく可視化

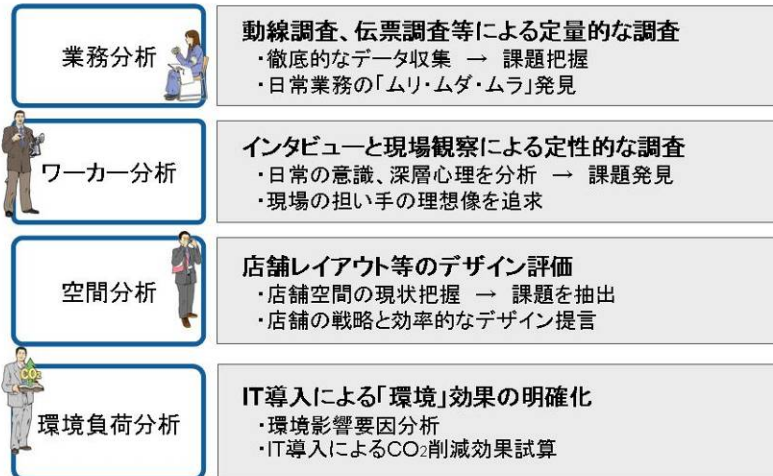


図8 現場分析の4つのアプローチ

これらは、従来からシステム開発のプロセスとして取り入れられていた部分もあり、一般的には UD 視点のアプローチとはいえないところもありますが、全ての要素を人を中心に考えていくヒューマン・センタード・デザイン (HCD) のアプローチとして再構築することにより、富士通では広い意味で UD プロセスの一部と捉えています。ソリューションデザインではこれらの分析結果をもとに、IT、Workplace、Work Style をトータルに捉えてお客様への提案としていきます。以下は金融営業店におけるトータルデザインの事例です (図 9)。

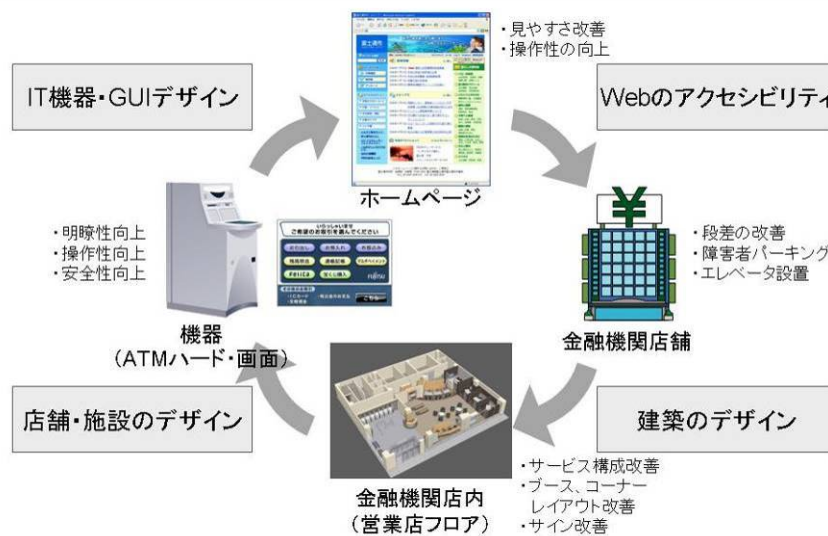


図 9 トータルデザインの事例(金融営業店)

教育への取り組みとしては富士通社員全員がユニバーサルデザインの目的と必要性を理解し、自らのテーマとして取り組むことを目的として、e-Learning による全社教育を 2004 年度に実施しました。続いて 2008 年度の実施を目標に、現在プログラム内容の見直し作業を進めています。また、社内向けにはダイバーシティ対応として、聴覚障害者に配慮したワークスタイルを学ぶことを主旨とした「パソコン要約筆記セミナー」なども実施しています。需要の高いウェブ・アクセシビリティに関して、教育講座「詳解！ウェブ・アクセシビリティ」や解説テキスト「“よくわかる”ウェブ・アクセシビリティ&ユーザビリティ」などの開発を行いお客様へ提供しています。



写真 上左右ともパソコン要約筆記セミナーの様子

また、これらの取り組みを社外に情報発信してゆく活動として、ホームページや環境報告書などでの活動紹介のほか、富士通フォーラムをはじめとする各種の展示会でユニバーサルデザインの一取り組みを展示しており、お客様とのコミュニケーションを通じ、次の開発に活かせるフィードバック情報が得られる貴重な機会となっています。2004年度の富士通フォーラムからUDの独立コーナーが設置され、製品・サービスの紹介やツール・ガイドラインなどを具体的に見える形にして紹介してきました。また、富士通フォーラムではお客様へのウェブでの事前告知から、会場でのサポートや配慮点、情報保障など一貫したイベントでのUDの考え方をガイドラインとしてまとめ、分かりやすく、見やすいプレゼンテーションや展示、幅広いお客様に配慮したイベント実現のための支援を行っています。さらに2006年度からはコーナーの構成を環境と一体にして、CSRの視点も含め企業の取り組みとして、より統合した見せ方となるよう試行しています。

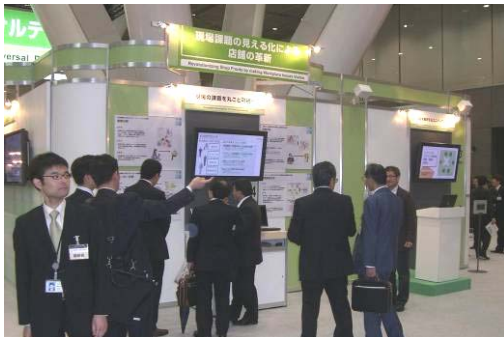


写真 左上:富士通フォーラム 2008 展示会場 右上:同セミナー会場

社外団体での活動としては、IAUDの他にも、関連活動団体への積極的な参加や社会貢献活動を通して、業際的な理念や指針の構築や、その成果を商品・サービスの開発・改善に活かす取り組みを行っています。

●今後に向けて

UDはIAUD会員の皆さまは既知の通り、単なる高齢者や障害者対策ではなく、お客様の多様性を理解し、お客様の使用シーンに合った操作性に優れた商品・サービスを提供するプロセスを通し、その対象とする範囲を拡大していく活動です。それは企業にとってCSRや社会貢献としてだけの取り組みでなく、対象範囲が拡大することは市場の拡大でありビジネスが広がる可能性を意味しています。

その可能性を具体的なビジネスチャンスとするためには、お客様の使用現場や状況、お客様の思いなどを幅広く捉え理解するための活動をさらに強化する必要があります。お客様とのコミュニケーションチャネルの拡大や、現場モニタリングなどの分析手法、企画・開発へフィードバックするしくみづくりなどが重要課題といえます。そのためには商品・サービスの企画から設計・製造、品質検査、リサイクルまで含めたライフサイクルで捉え、製販一体となってその価値を共有し、実践できる組織的な連携が重要です。UDの推進は、即ちお客様起点活動の一環であり、お客様満足度向上のための全社活動といえます。

さらには、UD即ち多様な人に配慮することは、環境問題とともに企業の重要な経営課題となってきています。UDと環境はこれまでは別々に考えられることが多かったのですが、企業がサステナブル・カンパニーとして存続・発展してゆくには、今後はこの二つの課題をトータルに捉え、さらに上位の統合したコンセプトでグループ全体の取り組みとすることを目指していきたいと考えています。



以上

Case study: 標準化研究WG

■ IAUDマトリックス開発

●UD製品の開発に役立つ標準化のツール&プロセスの提案

●多様な製品におけるUDへの配慮促進を目指して

IAUDの標準化研究ワーキンググループでは、幅広業種が集まり、企業の壁を超えて、ユニヴァーサルデザインの標準化について研究しています。活動の目標は2つあります。

- ・IAUD会員各社で活用できるUDの標準化を推進
- ・広く社会で活用できる標準化の提案を行う

そのための具体的な検討として、ユニヴァーサルデザインマトリックスと、マトリックスに対応するUD対応事例集の研究作成を行っています。

「IAUD・UDマトリックス」は、2007年10月にIAUD会員向けに公開しました。

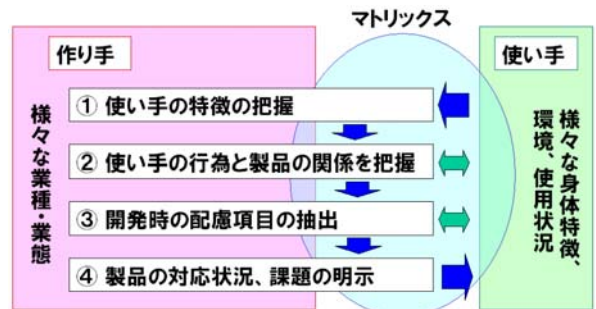


●「IAUD・UDマトリックス」

～使い手と作り手を結ぶ製品開発と評価のツール

「UDの開発」および「UD対応状態の明示」という場面において、製品の使い手（ユーザー）と作り手（開発者）が関わる4つのフェイズが考えられます。

- ・様々な使い手の特徴を把握する
- ・様々な環境や使用状況において、使い手の行為、すなわち、使い方や手順を把握する
- ・それらを踏まえた上で、製品開発の際に配慮すべき項目を抽出する
- ・できた製品がどこまで使い手に対応できているか、また課題はどこにあるのかななどを明示する



これらの各段階で、使い手と作り手を結ぶツールとして、「IAUD・UDマトリックス」を提案しました。

マトリックスの横軸は、人間の感覚や運動の機能をカテゴリー毎に分類しています。各カテゴリーはその機能の程度によって細分化しています。具体的には、

- ・どんな人がいるか？
- ・主にどのような特徴を持つか？
- ・どのくらい（人口）いるのか？
- ・原因は、病名は？
- ・自助具、支援機器などとの関係は？

		① 人の特徴 属性									
		見る	聴く	嗅く	味わう	体質	触る	操作する	移動する	話す	理解する
② 操作ステップ ↓	1	・どんな人がいるか？ ・主にどのような特徴を持つか？ ・どのくらい（人口）いるのか？ ・原因は、病名は？ ・自助具、支援機器などとの関係は？									
	2										
3											
4											
5											

縦軸は、各製品の使用時の動作・操作を細分化して記入します。例えば、電源を入れる→原稿をおく→枚数をセットする…（コピー機の例）や、ドアを開ける→乗り込む→シートベルトをする…（クルマの例）があげられます。

		① 人の特徴 属性									
		見る	聴く	嗅ぐ	味わう	体質	触る	操作する	移動する	話す	理解する
↑② 操作ステップ↓	電源を入れる	各製品の使用時の動作・操作を記入 例：電源を入れる、原稿をおく、枚数をセットする… ドアを開ける、乗り込む、シートベルトをする… ドアをあける、カギをかける、便座を開ける、… など									
	原稿をおく										
	枚数をセット										

横軸と縦軸の交点、マトリックスの中身は、操作ステップ毎に、どのような人に対応しているのか、あるいは対応するためには何を行うべきかを記入します。例えば、電源を入れる際に、見るというカテゴリーでは、全盲の方に対しては「視覚以外でも電源が入っていることがわかる」という配慮項目があり、解決例として「音で知らせる／形の変化で知らせる」などの手段を考えることができます。耳の聴こえない方にはまた違った配慮項目や解決例が考えられます。このように各ステップ、各ユーザカテゴリーに対応する升目を埋めていくことで、配慮しなければならない項目と具体例を網羅的に抽出することができます。

		① 人の特徴 属性									
		見る	聴く	嗅ぐ	味わう	体質	触る	操作する	移動する	話す	理解する
↑② 操作ステップ↓	電源を入れる	・全盲→視覚以外でも電源が入っていることがわかる 例：音で知らせる／形の変化で知らせる ・弱視→電源がわかりやすい 例：大きな文字表示／高いコントラスト わかりやすい位置									
	原稿をおく										
	枚数をセット										

また、どのステップまで配慮されているか、途中に配慮の足りないステップはないかなどをチェックすることもできます。さらに、縦軸に様々な製品をいれることで、この製品はどれだけ対応ができていますか、課題はどこにあるかなどの明示ができます。

	見る			聞く	
	全盲	弱視	高齢者	失聴	難聴
生活家電A	△	○	○	○	○
自家用車A (運転時)	×	×	○	△	○
音響機器C	○	○	○	×	△
...					

マトリックスの基本構成は、日本人間工学会 (JapanErgonomics Society) でも、研究、提案がなされているものです。

●より充実した「IAUD・UD マトリックス」作りへ

標準化研究 WG では、マトリックスを実際に使ってみて検討しました。その結果、次の要望が浮かびました。

- ・使い手のことをもっとよく知りたい
- ・対応技術を担当する製品に直接結び付けたい
- ・より手軽に、効率的に使えるようにしたい
- ・様々な分野で使用し、検証してみたい

これに対して、様々な分野の専門家の方々にお話を伺った上で、

- ・状態の程度により、ユーザ分類を細分化。また、状態の詳細情報を付加
- ・ユーザ機能にともない、詳細情報を調査追加しました。

状態の程度	見る							
	視野	視力		色覚	加齢性		特殊な状況下	
状態の程度 (2~5級)	視野狭窄 (2~5級)	全盲 (1級)	弱視 (2~6級)	矯正視力 0.2~0.6	1色覚	2色覚 異常3色覚	白内障 老視	暗い部屋で使う ・手探りで操作する ・メガネ、コンタクトを使えない 他

状態の程度	見る			
	視野	視力		
状態の程度 (2~5級)	視野狭窄 (2~5級)	全盲 (1級)	弱視 (2~6級)	矯正視力 0.2~0.6
概要	緑内障	角膜混濁→暗いところが苦手 角膜軟化症、角膜白斑、網膜はく離、 ~中暗~ 眼色素の欠乏→まぶしさ		
代替手段・ 自助具など	首や物を 振ることで 把握	白杖、点字/点字図書、立体地図/立体図 など、電子図書(DAISY)、OCRによる読み 上げシステム、点字ディスプレイ ……		
日本の該当 者数	30.1万人(人口比率: %) 1級:10.5万人、2級:7.4万人、3級:2.7万人、 4級:2.8万人、5級:3.4万人、6級:3.2万人…			

また、エクセルシートの検討により、膨大なデータをコンパクトにおさめ使いやすくして使い勝手の向上を図りました。

特に、状態の程度によるユーザ分類の細分化と詳細情報の付加は、障がいの程度を把握することで対応方法の違いもわかるという点で重要です。

例えば視覚では、単に「見る」ということでも、視野の問題、視力の問題、色覚、あるいは加齢と関連の深い症状など、様々な状態があります。また、暗い部屋で作業する時、風呂などでコンタクトが使えないなどは、誰でも経験することです。設計者に、特別なユーザだけが対象ではないということを感じてもらうために、なるべくこのような状況の事例を多くあげています。

以上のような検討を加え作成したものを IAUD・UD マトリックスとして公開させて頂きましたが、普及促進のために、まずは標準化研究 WG 内で、実際に活用しながら製品評価を行うワークショップを実施しました。

この結果、UD 評価の視点を漏れなく確認できる、マトリックスで予め評価ポイントを絞り込む効率的な評価が行えたなど、その効果を実感することができました。一方で、マトリックスの使い方、書式、或いは中身についてもいろいろな課題が洗い出すことができましたので、引き続き改善の活動を行って行きます。今後は、IAUD 会員のみなさまに広く使って頂き、活用の仕方、工夫を共有し、ブラッシュアップしていきたいと考えています。



●UD 配慮事例のビジュアルな情報の提供

「UD 配慮事例集」として、色々な製品で UD に配慮した事例をビジュアル化してまとめました。「IAUD・UD マトリックス」を活用する時の参考として、具体的で分かりやすい情報提供を行っていかうという狙いです。

標準化研究 WG のメンバーから収集した事例を、「IAUD・UD マトリックス」のフォーマットにあわせて分類しました。今後は、IAUD 会員の皆様から広く事例収集をし、共有を図って行きたいと考えています。

●UD 製品開発の実場面での適用に向けて

これらのツールの、実際の製品開発や評価の中での活用を促進するために、更に使いやすく有効なツールとすべく WG 活動を推進中です。毎月の会合では、WG メンバー各社で実際に使ってみた結果を持ち寄って報告し合い、その過程で見つかった課題対応を協議し、レベルアップを図っています。この活動を通じて、WG メンバーの啓発、知見獲得機会の提供できる活動を続けて行きたいと考えています。

今後更に、その成果を持って、IAUD 外への一般公開、あるいは外との連携の検討も進めて行きます。

IAUD標準化研究WG UDマトリックス絵本(事例集) 2008.03.04

ユーザの特性/障	見る	聞く	触る	動かす	操作する	移動する	記憶する	入力する	出力する
視覚	色覚	聴覚	触覚	運動機能	認知機能	記憶力	集中力	入力手段	出力手段
聴覚	色覚	聴覚	触覚	運動機能	認知機能	記憶力	集中力	入力手段	出力手段
触覚	色覚	聴覚	触覚	運動機能	認知機能	記憶力	集中力	入力手段	出力手段
運動機能	色覚	聴覚	触覚	運動機能	認知機能	記憶力	集中力	入力手段	出力手段
認知機能	色覚	聴覚	触覚	運動機能	認知機能	記憶力	集中力	入力手段	出力手段
記憶力	色覚	聴覚	触覚	運動機能	認知機能	記憶力	集中力	入力手段	出力手段
集中力	色覚	聴覚	触覚	運動機能	認知機能	記憶力	集中力	入力手段	出力手段
入力手段	色覚	聴覚	触覚	運動機能	認知機能	記憶力	集中力	入力手段	出力手段
出力手段	色覚	聴覚	触覚	運動機能	認知機能	記憶力	集中力	入力手段	出力手段

第一色覚障がい

第二色覚障がい

音声案内と組み合わせて点字や触覚記号で LCD画面を利用できるシステム (銀行ATM)

テレビリモコンの例。文字は背景色に対して十分なコントラストを確保する。

10キーの「5」に凸記号があるので全盲者でも数字入力ができる

60mm角の大型エレベータボタン。文字が大きくて見やすい

全盲者でも音声で時刻を話してくれるのわかる

視覚や高齢者にとって、主要キーのコントラストが高く見やすい。主要キーには、凸点/凸バーがついている

世界の UD 動向

●ノルウェーUD講演実施報告

トヨタ自動車株式会社 デザイン開発部 長屋
2008.06.25

ノルウェー・デザイン・カウンシルの企画で、European Business Conference 2008 というビジネスセミナーミーティングが、ノルウェー、オスロにて開催となり、IAUD の京都大会の折に来日頂いたロンドンの Royal College of Art、Julia Cassim さんより IAUD 大島様に依頼あって、私がトヨタ自動車より出講させて頂く事となりました。貴重な経験の機会を得ることができ、関係の方々に深く感謝申し上げます。

つきましては、下記に簡単にその概要をレポート致します。

- ・主催： Norwegian Design Council Royal College of Art Helen Hamlyn Centre 後援
- ・開催地/期間： Norway Oslo 2008年5月5～6日
- ・趣旨： Inclusive Design (UD)を機軸とした欧州(北欧)のデザインビジネス活性化。
- ・おもな講演者

Jeremy Myerson	Director, Royal College of Art
Julia Cassim	Senior Research Fellow, Royal Collage of Art
Maria Benktzon	Professor, Ergonomidesign, Sweden.
Olav Rand Bringa	Consultant, ministry of children and equality, Norway.
Rama Gheerawo	Innovation Manager, Royal College of Art
Alison Wright	Managing Director, Easy Living Home ltd., UK
Jarmo Lehtonen	Design Research Manager, Nokia Design, Finland
Toshimitsu Sadamura	President, GA-TAP, Japan

*京都の国際UD会議でも登壇された GA-TAP の定村様もご講演されました。



オスロ市街。非常に美しい街。トロリーバスや、市庁舎に面した入り江も絵になる美しさ。



会場の NDC 外観と、カウンシルのセッティング。



Julia Cassim さんの講演。
IAUD でのデザインマラソンの紹介があり、
今回の Norway のイベントとしても彼女の
リーディングにてデザインマラソンが実施
されました。



私の講演風景。
Aiming at a Sustainable Society
「持続する社会を目指して」と題打って実施し
ました。UD は地道な取り組みだが、広めていく
ことと「継続発展させる」サステイナビリティ
が大切と述べました。



ノルウェーをはじめとした北欧の参加者。
懇親会は大いに盛り上がりました。

● INCLUDE 2009 論文募集

王立芸術大学院ヘレンハムリン研究所は、2009年4月5-8日、王立芸術大学で開催の「Include 2009 インクルーシブデザインの改革：デザイン、研究、ビジネス分野での変わりつつある実践」と題して論文を募集いたします。

http://www.hhc.rca.ac.uk/1350/all/1/call_for_papers.aspx

Include 2009 はジョン・クラークソン教授（ケンブリッジ大学エンジニアリングデザイン）、ステイーヴ・ウィルコックス（デザイン科学）とメラニー・ハワード（未来学者、「未来を解き明かす」の著者）が議長を務めます。また、アリスティア・マクドナルド教授（グラスゴー美術大学）が論文審査委員長を務めます。

Include 2009 は第5回国際インクルーシブデザイン会議であり、ユーザー中心のデザインに関する実践、研究、公報に従事する方々を対象としています。

学者、デザインマネージャー、デザイナー、デザイン教育に携わる人、デザインコミッショナーなどから、それぞれの分野での革新的成果について、インクルーシブデザインでの取り組みについて論文を募集いたします。

募集には下記テーマなどが含まれます。

- ・新規且つ最近現れつつある実践
- ・新しいユーザー（年齢や障害を超えた研究）
- ・新しいデザイナー
- ・新しいアイディアの実現
- ・人間中心の改革

議論となる問題点や経験は下記項目などを含みます。

- ・インクルーシブデザイン・アプローチを達成するデザイン教育の変化
- ・インクルーシブデザイン立法および政策
- ・ユーザーとの協力研究
- ・インクルーシブデザインへの障壁
- ・考慮されていないデザイン – 除外されているのは？

投稿上のガイドライン

- ・寄稿者は未発表の論文を6ページ（レファレンス、画像を含む）提出してください。以下のテンプレートをダウンロードしてください。

http://www.hhc.rca.ac.uk/210/all/1/include_network.aspx

- ・会議言語は英語。
- ・論文タイトルや本文中に投稿者の名前・所属を記載しないでください。匿名のピアレビューのため。
- ・採用論文は論文集に掲載されます。
- ・論文採用者は講演かポスターにて発表。
- ・ワークショップでの提案はお受けしておりません。
- ・基調発表者は審査により決定し、オリジナル原稿を広げてご招待いたします。
- ・論文は2008年10月1日までサイトを通して受付いたします。

タイムテーブル

2008年10月	1日	論文投稿締切
2008年12月	8日	審査論文発表
2009年1月	19日	会議登録開始
2009年1月	26日	修正論文締切
2009年4月	5日	オープニングレセプション
2009年4月	6-8日	Include 2009

Include 2009 へご興味のある方は下記へ登録しますと登録料のディスカウントが受けられます。

http://www.hhc.rca.ac.uk/210/all/1/include_network.aspx

質問や情報については以下へお寄せください。 include@rca.ac.uk

●IAUD後援「第4回ユニバーサルキャンプ in 八丈島」のご案内

IAUD 準会員の「NPO ユニバーサルイベント協会」では、さまざまな特性を持つ人々が生き活きと共に仕事や生活ができる社会環境を広げていくために、ユニバーサルキャンプを以下の日程で行います。

日程：2008年9月6日土曜日から8日月曜日

場所：八丈島底土キャンプ場とその周辺

申込締切り：8月5日火曜日

今年で4回目となるユニバーサルキャンプ in 八丈島。キャンプという非日常の中で、誰もが不便さを体験しコミュニケーションをとりながら、ダイバーシティ（多様性）の理解と、UD商品やサービスへの感性を磨きます。

互いの違いを知り、その能力に驚き、不便さとは何かを知る「ダイバーシティコミュニケーション」はもちろん、皆で一緒にスポーツを楽しむ「ユニバーサルスポーツ大会」、八丈島に暮らす方々との交流を楽しみ、見て聞いて食べて楽しむ「ユニバーサル盆踊り」を開催します。

ユニバーサルキャンプには、企業参加と一般参加の2種類のプログラムがあります。

企業研修プログラム

ユニバーサルキャンプ企業研修プログラムでは、キャンプを通じてUDの感性や視点を磨くことで、参加者の業務の幅を広げ、組織の事業に役立てていくことを目的としたプログラムです。八丈島で開催される2泊3日のユニバーサルキャンプと研修（於東京）がセットで習得できるプログラムです。企業による個人活動支援等の制度をご利用いただけますと幸いです。

・事前研修は講義と実習

ユニバーサル環境を推進するための社会的背景と多様性の理解を、キャンプの事前に講義と実習で習得します。昨年の実習は代々木公園にて、車いすと白杖を使っての移動体験を行いました。講師は毎年、障がい当事者をお願いしており、昨年も視覚障がい者と車イス使用者をお招きしました。当事者の生の声が聞ける実習はとても勉強になると、毎年大好評です。

・キャンプでは気づきから行動へ

事前研修で習得したダイバーシティの気づきと理解を、八丈島では実際の行動にうつします。総勢100名の参加者と一緒にキャンププログラムを体験し、互いに対等な関係で協力しながらサポートしあう経験を通して、互いの違いに気づき、一人ひとりが尊厳を持つ対等な関係としての自立・自律を目指します。

・事後研修では気づきを具体化へ

ユニバーサルキャンプの体験を仕事や活動に活かすためのワークショップと講義を行います。キャンプの気づきを整理し、実際の仕事に行かせる商品・サービスへの配慮の視点を考えながらの商品企画を考えたり、さまざまなお客さまへの対応方法を考えたりします。

八丈島での濃密な3日間と、事前・事後研修を共に体験することによって、キャンプ参加者同士、互いの特性を越えて深い絆が出来上がります。今後、ビジネスだけでなく、プライベートでも新しい世界が広がっていくことでしょう。

詳しい情報は下記へお問い合わせください。

東京都港区港南 2-12-27 イケダヤ品川ビル 3F

株式会社UD ジャパン内

NPO ユニバーサルイベント協会

e-mail : <mailto:info@u-event.jp> (アドレスが変わりました)

Tel : 03-5460-8858 Fax : 03-5460-0240

NPO ユニバーサルイベント協会ホームページ

<http://u-event.jp/08unicamp/u-camp1.html> (アドレスが変わりました)

「第1回ユニバーサルキャンプ in 八丈島」の様子は、以下からご覧になれます。

<http://www.iaud.net/dayori-f/archives/0510/13-163501.php>

●静岡県のUD取組事例（コミュニケーション支援ボード）

静岡県では、すべての人が自由に活動し、いきいきと生活できる魅力ある“しずおか”を実現するため、ユニバーサルデザインによる「まち、もの、社会環境づくり」を推進しています。今年度の施策の一つとして、知的障害や聴覚障害のある人、外国人など言葉によるコミュニケーションが取りづらい人たちのコミュニケーションの一助となる、話し言葉を絵によって表現した「コミュニケーション支援ボード」の普及に取り組んでいくこととしています。

この一環として、コミュニケーション支援ボードの説明会を県内3箇所で開催していきます。詳しくは、ホームページをご覧ください。

<http://www.pref.shizuoka.jp/ud/form/communication.html>

【参考ホームページ】

明治安田こころの健康財団

<http://www.my-kokoro.jp/communication/index.shtml>

横浜市

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/shogai/kankoubutu/board/kyukyuu.html>

●新書情報

Universal and Accessible Design for Products, Services, and Processes

製品、サービス、プロセスのためのユニヴァーサルデザイン・アクセシブルデザイン

著者：Robert F. Erlandson（ミシガン州/ウェイン州立大学）

CRC Press、ISBN 978-0-8493-7493-7

ユニヴァーサルデザイン・アクセシブルデザイン原則の理論と応用についての包括的処方について

新しい法律、グローバルな競争、技術の進歩、進化する社会的価値、そして障害というコンセプト、それらすべては、ユニヴァーサルデザイン・アクセシブルデザインの考えやコンセプト、戦略や方法を統合して実践することを、デザイン分野に求めています。

このような動きは国際的にも広まっており、伝統的なデザインのコンセプトを発展させ、ユニヴァーサルデザイン・アクセシブルデザインの原則を採用し利用することを当事者に要求しています。これらの原則を効果的に遂行することが、今やデザインの核となる要素であり、今日のグローバル市場で成功するために本質的なことです。

本著書では、最近の国内外の立法やグローバル市場の圧力によってもたらされたデザイン原則を紹介します。4章で構成され、第1章ではユニヴァーサルデザイン・アクセシブルデザインの成長を持続させる社会的、グローバルな課題について大まかに述べています。明快で取り組み可能な例を用い、アクセシブルデザインとユニヴァーサルデザインを定義し、また差別化し、デザインという広範囲な内容の中でそれらの間の関係を掘り下げています。第2章では法律的な問題を取りあげ、アクセシブルデザインのために立法的な権限を形成するにおいて大きな影響を与える障害についての社会概念について説明しています。変化しつづけるアクセシブル法や法令準拠の助けとなるアクセス委員会（独立連邦機関）などの資料も含まれています。第3章では、ユニヴァーサルデザインの3つの主要なレベルの各々を例証するために、出来るだけ多くの分野にわたってデザイン戦略、実例および応用を多数紹介しています。すなわち、人間工学、知覚、認識力などの人間的機能の原則； 適応性、事故防止と誤作動の管理と可変性などをカバーするプロセス

に関する原則；公平なデザインの超越原則について。最後の章ではユニヴァーサルデザインの発展と今後の方向を検証しています。

本書は、定義や理論、そして応用を提供し、職業デザイナー、教育者および学生がこれらの原則を実行し、広範な社会的、競争的デザイン環境でいかにして適応するかを理解することの助けになるであろう。

特色

- ・Weber、Fechner、Stevenの冪乗則など精神運動法に基づくデザイン戦略について議論
- ・主流デザイン原則のモデルとしてWorld Wide Webのデザインコミュニティを紹介
- ・個人的、社会的両見地から障害倫理について考察
- ・原則の応用を紹介するために広範な分野から例証を提示
- ・ユニヴァーサルデザインとアクセシブルデザインの発展についてグローバルな背景で研究

目次

導入と定義

時は来たり

ユニヴァーサルデザイン、アクセシブルデザインとアダプタブルデザイン

障害、法とアクセシブルデザイン

障害とデザイン

アクセシブルデザイン

ユニヴァーサルデザイン原則、戦略と事例

UD原則の階層的構造とデザイン過程での適用

人間工学的な健全性

知覚可能性

認識的な健全性

柔軟性

事故防止と誤作動の管理

能率的（無駄の除去）

安定性と予言性

公平性：超越的、統合的

職場におけるユニヴァーサルデザインとアクセシブルデザイン

WWW：ユニヴァーサルデザインとアクセシブルデザイン

倫理的考察と結論

倫理とユニヴァーサルデザイン

社会的、政治的観点からのユニヴァーサルデザインとアクセシブルデザイン

インデックス

Newsletter では、誌面を会員の皆さまの UD に関わる情報交換の場と位置づけています。ぜひ、会員企業の UD 商品開発事例や PJ/WG の活動成果事例等の情報をお寄せ下さい。また、国内外の UD 関連イベント、シンポジウム等の開催情報もお寄せ下さい。ご連絡は、news@iaud.netへ直接、メールをお送りいただくか、事務局あるいはサロンへお問い合わせいただいても結構です。

無断転載禁止

IAUD Newsletter No.3

2008 年 6 月 30 日発行

国際ユニヴァーサルデザイン協議会

事務局:225-0003 横浜市青葉区新石川 2-13-18-110

電話:045-901-8420 FAX:045-901-8417

e-mail:info@iaud.net

IAUD サロン:104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9

トヨタ八丁堀ビル 4 階

電話:03-5541-5846 FAX:03-5541-5847

e-mail:salon@iaud.net